「江戸住大商人の肖像－場末の仲買　高崎屋の成長」

従来の江戸の商人史は、史料的制約と全国的流通機構への関心から、三井越後屋など上方に本店を持ち、江戸の中心部に出店を構えた問屋商人の研究に収斂していた。そこで、江戸の場末駒込の酒仲買・小売商人高崎屋をとりあげ、絵画資料を活用し、さらに近世考古学の成果にも学び、江戸を本拠とする小売・仲買層の商人の成長過程の特質と都市社会における展開を検討する。

高崎屋は、18 世紀末より大きく発展し、文政 13（1830）年には中心部の日本橋小網町へ問屋部門を設け、幕末には複数の店舗で酒・醤油・炭薪・両替・蝋燭・質を営んだ。こうして高崎屋が成長を遂げた動因は、仲買・小売りとしての仕入・販売における工夫にあった。酒に関しては下り酒のほか安価な中国酒（東海地方で生産する酒）を仲買として仕入れるほか、無銘柄酒に自身のブランド「江戸一」を冠して売り出し、名声を得た。また醤油については、問屋として地廻り製品を扱い、野田の醤油醸造家高梨家と縁戚関係になるなど取引関係を強めた。こうして仕入れた商品を近辺の旅籠屋や武家屋敷に樽単位で販売するのみならず、近辺の農村・町や武家奉公人へ安価で量り売りする、という二つの販売方法によって、高崎屋は発展したのである。

こうして成長した高崎屋は、多数の土地を所持し、巨大店舗を形成し、下層民へ施行を行うなど、都市内の小地域を統合するヘゲモニー主体となった。さらに、俳諧や法華信仰などの文化的活動に積極的にかかわったという点が特徴的である。また、本国とパイプをもち、子供を奉公人として採用していた他国住商人とは奉公人のあり方もことなっていた。奉公人の出身地はまちまちで、中年奉公（中途採用）がシステム化されていた。菩提寺を中心とした熱烈な法華信仰や民間信仰への傾倒は、「家」の精神的統合としての意味も持つと考えられる。

こうした江戸住大商人の検討を重ねていくことが、江戸の商人史・都市史には今後不可欠であろう。